

11

日本空軍がダーウィンを襲う――

人びとは狂ったように逃げまどい、

暴徒たちは略奪をくり広げた。

やがて大戦は終わりを告げるが

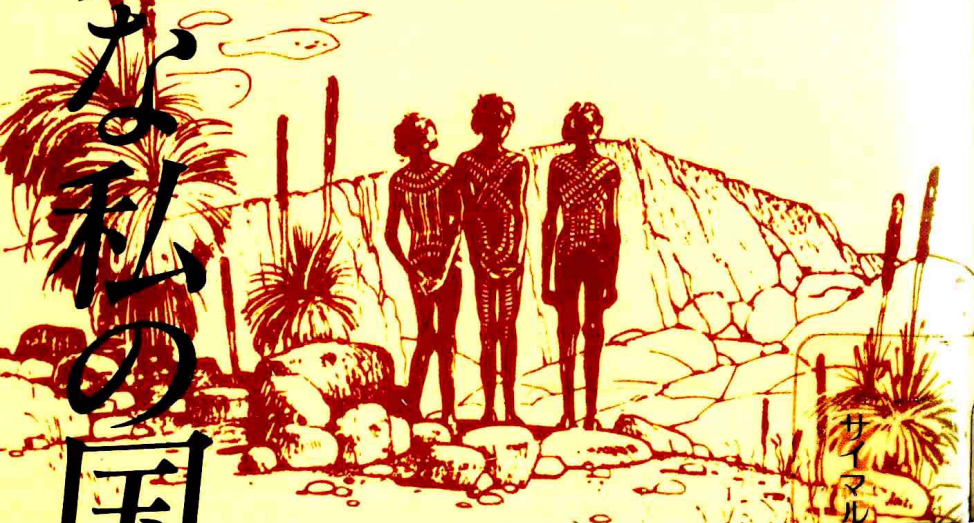
リング・プレースに壮絶な悲劇が。

プア・フェロー・マイ・カントリー！

ザヴィアハーバート

越智道雄訳

かわいそう な私の国



サイマル出版会

かわいそうな私の国

ザヴィア・ハーバート
越智道雄訳



サイマル出版会のめざすもの

*サイマル出版会は、激動する現代史の創造に読者とともに参加する姿勢で、国際的言論活動を展開するべく出発した。

*思えば、人類は平和のために戦争を続け、世界は一つであることを願いながら分裂し続けてきた。科学の発展は、電子情報時代をもたらししたが、情報の同時性はまた単純同一反応性をも生み、新たな誤解に苦悩する結果となっている。

*われわれは、こうした新たな誤解による相剋の根をとり除くために、また世界の指導国家として再登場した日本の国際的資質を豊かにし、国内の諸課題を鋭角的にとらえ、国際間の理解を深めるための現実的歴史的素材を提供しようと志すものである。そして地球上のコミュニケーションを円滑にすることによって、人間の条件を回復し、世界が平和に一つに運営統合される事業に、言論活動によって寄与しようとするものである。

*このささやかながらも高き理想に精進せんとするわれわれに、幸いにして読者諸賢のご支援を期待してやまない。

(訳者紹介)

越智 道雄

明治大学教授。作家。1936年愛媛県生まれ。広島大学大学院を卒業。豪州のノーベル賞作家パトリック・ホワイトの作品を訳出するなど、新しい文学分野「コモンウェルス文学」の紹介者として、また第42回シドニー国際ペン大会には日本代表として精力的に活躍するほか、新進の小説家として創作活動にも励んでいる。豪日交流基金とオーストラリア・カウンスル文学局の奨学金を受け、78年4月から一年間、シドニー大学に研究員として訪豪。訳書にP・ホワイト『ヴォス』(サイマル出版会)、A・プリング『アフリカの悲劇』、J・ミーカー『喜劇としての人間』、H・プリンスミード『青さぎ牧場』など多数があり、作品集に『遺贈された生活』がある。

現住所・〒228 神奈川県相模原市相模台2-20-3

Japanese translation rights arranged with
William Collins Publishers Pty Ltd, Sydney.

日本の読者へ——ザウイア・ハーバート

オーストラリア文学の記念碑——訳者まえがき

第1部 テラ・オーストラリス

おだやかな原住民の生活を打ち壊す

白人暴徒、泥棒、偽善者たち。

(1・2・3・4 卷)

第2部 オーストラリア・フェリックス

白人の理想も、同じ白人の悪漢、愚者に裏切られて。

(5・6・7・8 卷)

第3部 屈辱の日

民族自立のための試練から逃げだす

烏合の衆。

(9・10・11 卷)

* 主要登場人物 *

ブリンディ マーティン・ディレーシー
とアポリジナル女性のあいだに生
まれた四分の一混血児。本書の主
人公。

ディレーシー、ジェレミー
マーティンと克蘭シーの父。リ
リー・ラグーンズで鉱山及び牧場
を経営。本書の副主人公。

エスク將軍、マーク卿

大英帝國によつて任命されたオー
ストラリア軍最高司令官。

「大嵐ボブ」

ボブウィリディリディ参照。

オカダ船長 日本人の真珠採業者。

カピティ博士、カスパート

アポリジニ保護官。

カフーン、ディニー 巡査部長。

カリティ、フライディ コン・カリティ
の妻。フィヌーケインの長女。

キャンドルマス、イールフリーダ（アル
フィ） アポリジナルの待遇改善にとり組
む女流作家。

クーツ、フェビアン 文化人類学者。

グラスコック神父 レオポルド群島のカ
トリック伝道師。

「チーフ」 自由オーストラリア運動」
創立者。

ディレーシー、克蘭シー

ジェレミーの次男。キャットフィ
ッシュ牧場支配人。

ディレーシー、マーティン ジェレミー

の長男。ベアトリス・リヴァ牧場
支配人。ブリンディの父。

デーヴィッド プロテスタント伝道所の

トラック運転手。アポリジナルと
日本人とのあいだに生まれた混血
児。

ナナゴー ジェレミー・ディレーシーの

二度目の妻。ハーファースト。

ハナフォード、バット

列車機関士。共産党のデマゴグ。

バーブー、ラム（アリ・バーバ）

インド人行商人。

ビカリング判事 「北豪」最高裁判事。

フィヌーケイン、シェーマス（シェーム
＝オンリーアス）

ベアトリス・リヴァ・ホテル経営
者。アイルランド人。

フェリス、ファアガス

文化人類学者。パイロット。

ブルー、ピリー 驢馬馬者の御者。

ホッフ博士、クルト ユダヤ人亡命者。

「ボブウィリディリディ」（「大嵐ボブ」、
アポリジニ）「虹蛇」信仰のアポリジナル魔
術師。

術師。

マカスキー、エディ アポリジニ局役人。

マクフィー、フェイ パームストーン・プ

ログレシブ紙記者。

マリジック親下 カトリック伝道所高僧。

「やつこさん」 「自由オーストラリア運

動」の職員。

ローゼン、リフカー ユダヤ人亡命女性。

（アイウエオ順）

11

第3部

屈辱の日

24章	日本空軍来襲……………	1
25章	リング・プレースの悲劇……………	187
26章	三十年後……………	251
百万語の超大作を訳しておえて——訳者あとがき……………		279

第3部 屈辱の日

24章——日本空軍来襲

オーストラリア・アボリジナルには牧歌的な状態などまるで縁がなかったので（もつとも霊が、夢幻の場所、で再生の時期を待つ一種の冬眠期間は別だが）、一九四二年の猛烈極まる雨季が来襲した際にレオポルド島伝道所で確固不動のものとなった牧歌的状态を、彼らのあいだに自生してきた伝説のどれに喩えようにも、種がない始末だった。

あるいはいまとなつては、宗教的呼称は差し控えて、あつさりレオポルド島と呼ぶべきかもしれない。なにしろ島の僧侶たちは宗教的任務を放棄させるをえなくなつて逃げだしていたし、聖体拝領者たちも散り散り、最高責任者たるや自らの僧たる務めなど文字どおり嵐の中へ

II

吹きとばしてしまっていたのだ。

実のところ、宗教施設としてのこの場所の中心である礼拝堂、神の館は、信仰でもってそこを息づかせる神の下僕がいないので、しんかんと静まり返っていた。

僧侶のいない教会とは、いったいなんだろうか？

信仰を失った僧侶とは、いったいどういう存在なのか？

しかしながら雨また雨、雨また雨の数週間、くる日もくる日も愛し愛され合うこと以外余念のない毎日、これはまことに牧歌的な日々で、この場所自体声を大にして、いまこそここはあの、伝説のしあわせの国、に比肩するのではないかと叫んでいるような至福ぶりだった。

しかしいったいどの民族の伝説に、尽きることのない愛の魅惑にあふれ返る場所の話などあっただろうか？

中世の伝奇物語に出てくる、天国のこちら側からほど遠からぬ所、に位置するといわれる例の、大洋の島、アヴァロンですら、目下のところこの島と比べれば激しい幻滅しか与えてくれまい。あのフェイ・モーガナが兄のアーサー王に、彼の王妃グイネヴィアと彼お気に入りへのサー・ランスロットがねちりんこんやつてゐるわよと

耳打ちしたとき、『王の至福』も急に色褪せ、『百合娘』エレーンの悲劇に至って、完全にけしとんでしまったではないか？

かくしてあらゆる時代のあらゆる人びとにとって、恋愛は、アルカディアの人びとと至近距離にある者たち、つまりオーストラリアン・アボリジナルにとつてと同様、確かに不可思議な事柄ではあるにしても、現実的な側面から見ると厄介の種でしかなく、したがって、なすな恋の部類に入れられ、毒にも薬にもならないですむ伝説や伝奇物語の中以外では、まったく奨励されないことになるのだ。

確かに、『大洋の島』レオボルドで、『愛の至福』に酔い痴れていた二人は、『なすな恋』のタブーを犯していたことになる。たがいに愛し合っていたうえに、どこからも危害を加えられる惧れがなかったので、彼らはそんなことは気にしていなかったのだらう。

それでも少なくとも初めのうちは、彼らに代わって心配してくれる者がいたのだ。アルカディアの無粋者はデュー・ウィッド修道士だった。

尊敬おくあたわざる神父、聖油をぬられていない者は

背をかがめてその不貞に対する悔悟の鞭をその手から受けなければならぬ告解室の聖なる管理人——このような立場の人物が放胆にも司祭館にあって不信心者のユダヤ女とベッドをともにしているとは！

また自分のお気に入りの侍僧にして見習い修道士のプリンディタるや、あれだけ教会がかわいい頭に祝福を注いでやったにもかかわらず、いぜんとしてユダヤ教徒よりもさらに一層の異教徒であるヒンズー教徒と判明している黒いおてんば娘と、学校に寝泊まりしているのだ！ おまけにあの小娘ときたら、さらにまずいことにはアボリジナルの掟に従えば、香炉を振っていた罪人「侍僧としてのプリンディ」にとつては部族関係上の妹に当たるではないか！ これがただの『なすな恋』ビジニチですむことか？ とんでもない。

そういえば、本当なら尊師と呼ばれてしかるべきあの御仁は、よくチャマラをルシファに喩えていたではなかったか？ え、なんてことを！ イン・ノミネ・パトリス、エト・フィリアイ、エト・スピリトゥス・サンクティ（父なる神、御子キリスト、聖霊の御名において）……アーメン！

デーヴィッド修道士がどんな気持でいたのかは、彼の行動からははっきりとうかがうことができない、というよりおよそ見当もつかなかった。それくらい奇妙な振る舞いに及んだのだ。

いずれにせよ、彼の支離滅裂な批判に当惑するはずの当人たちは、おたがい同士恍惚境にあつて、わざわざ彼の言葉に耳を貸すどころではなく、いくら長々といさめてみてもくすくす笑ったり肩をすくめたりするだけで、体よく彼を追っ払ってしまったのだ。

当然ステイヴン・グラスコックは彼の批判の矢面に立たざるをえない。デーヴィッドも初めのうちこそ自分の罪を告解した当の相手である神父を咎めだてすることゝをためらっていたけれども、やがて自分の正しさをもちに強調する鼻持ちならない存在になってきた。

明らかにグラスコックは、相手が自分の振る舞いを否認するのに対してあまり強烈な弁解をやらかして、このかわいそうな相手の信仰まで動揺させたくなかったのだ。そこで彼は、自分はこの職務を全うするには性格が弱すぎるのだと弁解してみせた。これが弱さというなら喜んでいくらでも弱くなつてみせるという気持でいたか

ら、その弁解が本気でないことはみえみえだったが。

しかし、彼のこの親切気が裏目に出て、デーヴィッドの心に、この伝道所の風紀と信仰面での忠誠さを守らなければならぬとする気持を、一層かきたてただけだった。

最初の日曜日に僧侶が礼拝堂の説教壇へついに姿を現わさなかったとき、デーヴィッドは自分が代わりにそこに立った。

実のところ裸の花嫁を連れ帰った夜以来、グラスコックは一度としてそこへきていない。プリンディからことのしだいを聞いたときも、彼はなにひとつ異を唱えなかった。

つまるところ日曜の総礼拝のあとで、黒人たちに配給食糧が配られるのだが、それを実際に手がけるのはデーヴィッドの仕事だったからだ。デーヴィッドは侍僧のいでたちでそれをやってのけた。

彼はプリンディにもこのいでたちをさせ、自分にかしずかせようとしたのだ。しかしプリンディはオルガンをひいて、命じられたとおり賛美歌をサヴィトラと歌う以上のサービスはしようとしなかった。

礼拝はほとんどがデーヴィッドの声高になりたてる原罪非難に終始し、まるで以前彼の主任牧師だったタスカー師の説教もかくやと思わせるやかましき。

実のところデーヴィッドは、ステイヴン・グラスコックにしつこく純潔を捨てた理由を訊いたとき、プロテスタントが祭司の独身制を拒んだのは正しかったのではないかと答えたので、いまでは彼もその宗派なら本来の欲望を抑えつけなくても純潔でいられることが分かっていたから、いささかプロテスタントに戻りかけていたのだ。

とにかくつぎの日曜になると、デーヴィッドは僧侶の完全礼装で登場、プリンディとサヴィトラをどなりつけて、自分の手から聖体拝領を受けさせようとさえた。

このことを伝え聞くと、グラスコックはデーヴィッドになにもいわなかったが、黙って礼拝堂へいくと、衣装をはじめ、無資格者が扱うと冒瀆行為と見られる道具類を手の届かない所へしまつて錠をおろしてしまつた。

グラスコックは今回のこの事態を、自分自身にすらうまく説明がつけられない。少なくともリフカーには、いまや完全に教会に対する敬意をなくしてしまつたとい

きりはしたものの、彼のいう教会のインチキに対する結構なジョークになりはててしまつたはずの事柄、つまり聖具への冒瀆を防ごうと汲々としていたのだ。

実のところ、彼はそのことでリフカーに冗談口を叩き、カトリックはなんて気違いじみていることか、なにしろそれに使う装身具たるや黒んぼが木のうろの中に隠しておく魔力をこめた代物とその神聖さの点でなんら変わらないのに、それらの道具の管理人はしかるべく構成された神学組織の発行になる修業修了証明証を所持していなければならぬとは、といった。

実際、それらの儀式用具や修了証など信じてもないくせに、連中のいいぐさではないが、「霊がわれらをつき動かす」とき狂つたようにはねまわるとは、キリスト教国のすべてがなんと気違いじみていることか。

彼女のほうはそれをジョークとは見ず、むしろ彼がいまは躍起になつてからかいの対象にしたがつているものに対して、当の彼がいぜんある程度の尊敬の念を残していることを喜ぶそぶりすらみせた。実のところ、彼女のいうことを聞いていると、彼が相変わらず聖職者の務めを果たす姿を見たがつているようにさえ見えたし、彼自

身口にしように、いかにこの宗教の実態が分かっているかを露呈しかけていたのだ。

おそらく黒んぼの血のしからしむるところだろう、いよいよ自分が神信心の務めを継げると思ったのにその機会を奪われたデーヴィッドが、怒り狂ってやってきたときには、僧侶もリフカーに対するような口のきき方はさすがにできかねた。

グラスコックは、教会のおえら方が騒いで、彼ら二人が教会の用具を使用したことで裁判沙汰になりかねないとしても答えるほかなかった。ついで初期キリスト教徒の礼拝様式の厳肅さについて触れ、それが古代ローマの多神教から実際にとり入れた手のこんだ儀式にとって代わられてきたかを説明した。

そしてさらに、デーヴィッドが平信徒として説教しても聖職者がありとあらゆる儀式をまじえて行なった説教に比べて、天国ではこれっぽっちも劣るものではないし、むしろより高く評価されるかもしれないといふ足した。

妻帯禁制のことがふたたび話題にのぼる。明らかに自分のまわりで進行中の姦淫行為に、デーヴィッドは気が動転しっ放しだったのだ。彼は妻帯のことを口にしたが、

同時に、まわりにいるのは黒人娘ばかりなのでしかるべき相手を見つけるむずかしさにも触れざるをえない。

グラスコックは相手の気を鎮めようとするあまり、本土へ出向いて適当な娘を見つける権利は彼にあるのだから、なんだったら平底舟と交渉を円滑にするために結納金も貸してやろう、なにも部族関係上は不正にならないのだからとまで申し出た。

目下の天候ではデーヴィッドが自分流儀の道を選んだとしても、一向にふしぎではない。いぜんとして尊師呼ばわりしている相手と話し合ってから二、三日してまたやってくると、さすがの尊師もしばし口がきけなくなるほどすさまじい提案をしたのである。

尊師は、自ら立てた誓いのためにリフカーと結婚できないわけだし、また現に彼女に結婚の申し込みをしたのは自分のほうが早いのである。式のほうは本格的かつ古式にのっとってあげたい。しかしだからといって、なにも自分だけが彼女を独占しようというのではない。神父が純潔に対する態度を変えた以上、ときおりチネキン〔密通〕するくらいは目をつむることにする。

グラスコックは危うく息が詰まらんばかり。しかし結構穏やかに、自分は僧職をひいて、彼女と正式に結婚するつもりでいるし、第一、女を共有するのは白人の流儀ではないときとした。そしてより強い口調で、黒人娘を選べと勧めたのである。それでも天候は本土行きを許さない。

デーヴィッドは次善の策を立てた。今度は尊師に切り出したのと同じ条件をプリンディに対して、しかしまったくもってむきつけに切り出したのだ。

彼いわく、サヴィトラと姦淫を犯すことによって、カトリックとして道義上の罪を犯しているばかりでなく、部族の掟にも違反している。かくいう自分は部族関係上はサヴィトラに対しては「ひとこ」「いとこ」の間柄なのだから、自分もまた彼女に対していきさか権利がある。いや、あつさり彼女をもらい受けてもよいが、自分は善良なキリスト教徒だから教会の祝福を受けて結婚しないといけない。神父にいつて、自分たちをみようとしてもらう。

プリンディがときどきチネキンしくるのは一向にかまわない。黒んぼ式にちよいとばかり、なすな恋、ピジ

ニチをやらかすくらいは、この淫乱極まる邪惡な所業に比べればものの数ではない。

最初のうちプリンディがこの申し出をどう受けとったかは、この奇妙な少年のいかなる心理状態もはなはだ見すかし難いように、なかなか分からなかった。単に例の灰色の目で、相手の扁桃型の目にじっと見入っていただけだ。別に返事をするでもない。

なにも知らずにデーヴィッドがその東洋風の目を淫らにましく彼女に向け、もはや相手が自分のものと決まったかのように彼女の身体に手をのばしたとき、サヴィトラは痛烈にやり返した。金切り声をあげて、こう叫んだのだ。

「このいまわしい黒んぼ日本人のろくでなし……あたいに變なことしてみな、お前のチンポ切り落としてやるからね!」。おあつらえむきに肉切り包丁が手近にあった少女はそれをひつ掴んだ。デーヴィッドはスタコラ逃げ出した。

二人は以後なん時間も、たがいに抱きあつてくつくつ笑い合った。

数日間、デーヴィッドを見かけた者はいなかった。や

が、逆にユダヤ教に関するものならどんなにかがわしい代物でも喜んで受け容れ、少なくとも合法的な人間の真理探求として受け容れる氣でいるらしい。

一方、福音を低能どもの大言壮語として片づけ、少なくとも人間のクラス分けと矯正し難い弱さを認める点ではイスラム教のほうが隠しだてしないとして、その氣違いいじみた宗教のほうがまだしもましだといひ出す始末。

最初のうち、リフカーは相手のこの急変ぶりがピンとこなかったが、やがて彼が非常に長いあいだキリスト教に疑問を抱き続けてきたと主張するのを納得するようになった。そのうち、相手が熱心に訊くのにほだされて、喜んで神学面と比較しながらユダヤ教の日常実践の模様——断食や聖餐の実態、恐るべき、律法の神ヤーヴェ^エに対するユダヤ人の謙虚な態度などについて話してやった。

神がこの地上に生きていたら、自分の家の窓という窓を片っぱしから壊してしまつたろうという古いユダヤのジョークを聞くと、彼は涙が出るほど笑つた。

そんなに人間味があるのか、と彼はいつた。ユダヤ教徒は敬神的になるかと思うと、がらりと不敬な振る舞い

に及ぶ——キリスト教徒が自らの罪、あるいは偽善のゆえにひつきりなしに惨めたらしく泣き言をいうのとは大違い。「聖なる言語」であるヘブライ語では不敬の觀念は表現されえないけれども、いくつかの言語からのごたまぜにヘブライ語独特の語形で味つけしたイディッシュ語は、まさに不敬を表明するために作られたものだから、必ずやその觀念を含んでいるはずだとする、すばらしいジョークがある。

「いわば神の蔭口を叩くための言語つてわけだ!」。彼は笑つた。

世界が自らをずたずたにひき裂いているときに、島ではこのように時が過ぎていつた。ときおり彼らもニュースは聞いた。ジャップどもは、いぜんとして大英帝国を牛耳っている例の太つちよの小男にいわせると、**「栄光ある大英帝国」**の最後の牙城、**「シンガポール要塞」**へ、銀輪部隊と称して自転車で楽々と迫りつつある——小男は自分はロンドンの地中深く掘り下げた防空壕の中にあつて、全世界に向かって、**「徹底抗戦!」**を叫び続けていたのだ。

しかしこの**「大洋の島」**からは大して離れてもいない

シンガポールは、ロンドンに劣らず、間遠い所のように思われた。連邦政府首相がアレクザンドリアのシスター街からオーストラリア軍司令官を本国へ召還しようと躍りになって「バリケードに突撃！」と氣勢をあげても、一向にはかがいがないでいるキャンベラも、同じく間遠い。

ロシア人はいまや恐るべき冬將軍の助けを得て、ドイツ軍を押し返し始め、かつてナポレオンの^{フランス軍}大陸軍を撃退したときのように、ドイツ軍は飢えに苦しむあまり、倒した敵の死骸をくらっているという噂。

それらのニュースも、単に間遠いだけでなく、島からわずかに数マイルの海上をポート・パームストーンに往來する、霧にかすむ空を走る夢の船のような船団と同じく、非現実にはしか見えない。

かといって、彼らが氣違い病院みたいな世界のさまざまな現実になったく無縁な存在になっていたわけではない。グラスコックのいうところによれば、これだけ外部の世界から放っておかれたのは、大英帝国オーストラリア海軍哨戒艇メルヴィル号がこの危険な海域で悪天候下に予測されるさまざまな危険ゆえに、こちらへまわって

こなかっただけのことだったのだ。

いまとなつては、いつやってくるか分からないが、不意をつかれることはまずあるまい。なにしろあれだけ大きな艦体だと、島へ安全に近づける水路はひとつしかなく、そこからだと、投錨するよりたつぷり三十分前に艦影を認めることができる。おまけにピクルズ中尉は、必ず気のすむまで汽笛を鳴らして、自らの到着を告げ知らせるのだ。

近ごろではまったくの緊急事態を除いて、無線は使われていない。しかしながら、島にいるとは思われていない者たちのほうも、いざというときには迅速に脱出する用意は万端整っていた。

いかに甘いピクルズにしても、ぎくばらんしに事の次第を打ち明けられた場合、これほどすさまじい戦時規約違反に対して、ネルソンの目を向ける（ふつう、上官の命令を故意に無視すること。ネルソン提督が、艦隊司令から退却命令のシグナルが出た時、見えない方の目に望遠鏡をあてがった故事から）とは思われない——特にその甘さが主として違反者どもの中心人物である女性に対する自らの惑溺に由来している場合にはなおさらだ。